［講演］

ベトナムにおける日本語教育事情および日本留学の動向と課題

ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学
日本言語文化学部　講師
タン・テイ・ミビン 氏

○**丸山**　最後のご登壇者をご紹介申し上げたいと思います。ベトナムからでタン・テイ・ミビン先生でいらっしゃいます。ミビン先生は、ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学で日本語を教えていらっしゃる先生です。こちらの大学には附属高校がありまして、きょうはそちらのお話を中心に、ベトナムの中等教育についてご説明いただけます。どうぞよろしくお願いいたします。

○**ミビン**　丸山先生、ご紹介ありがとうございました。ベトナムから参りましたミビンと申します。よろしくお願いします。

異文化環境で母語ではない言語でしゃべるとなかなかうまくしゃべれないと思いますけれども、どうぞお許しください。**【スライド⑥-1】**

では、早速、発表させていただきます。本日発表の内容ですけれども、本日のシンポジウムの趣旨に従って、こういう内容で進めていきたいと思います。**【スライド⑥-2】**

最初に、まず 1 つ目のベトナムにおける日本語教育の実情ですけれども、先ほど郭先生とアナン先生と、それからゼニ先生のご発表を聞いて、やっぱりベトナムでの日本語教育はかなり遅れていると感じています。

日本語教育の開始は 1957 年ですけれども、本格的に日本語教育がスタートするのは 1961 年にハノイ貿易大学でスタートしました。それから 1973 年ですね。ハノイ外国語大学で日本語教育がスタートしました。それから、かなり時間をあけてハノイ師範大学での日本語教育の開始は 1992 年です。**【スライド⑥-3、4】**

これから本論に入りますけれども、中等教育における日本語教育試行プロジェ

クトが立ち上げられ、中学校や高等高校で第一言語としての日本語教育が実施されているということです。2003年にスタートしたのですけれども、本格的に高校で教えられるようになったのは2005年ですね。初めて教えたのはハノイ外国語大学の附属高校で実施されました。それから2007年に一般の高校で日本語教育が開始しました。この同年度に、つまり2007年に日本語がベトナムの国民教育の正式な外国語教育の1つになったということです。こちらに少し情報を加えたいのですけれども、2007年に初めて高校卒業試験および大学入学試験に日本語が取り入れられたということです。**【スライド⑥-5】**

2013年に中等教育日本語教育試行段階が完了し、日本語教育が中等教育において完全に普及段階になります。

それから、特に2016年に、2012年国家外国語プロジェクトの第一外国語科目として、ハノイ4校ホーチミン1校の合計5つの小学校でも日本語教育がスタートしているということになります。**【スライド⑥-6】**

でも、ちょっと全体のほうを見ると、2016年の例ですけれども、この段階の統計によると、ベトナムの全国の日本語教育の機関数は219校ですね。教師数は1,795人と、学習者の数は6万4,863人ですけれども、そのほかも、正規教育機関以外の学習者の数は3万4,266人ぐらいいます。こちらは国際交流基金の調査のデータですけれども、この正規教育機関以外の学習者の数というのは、正規教育ではなくて、民間日本語教育機関ですね。あるいは日本語センターとか、実習生のための日本語を教育するセンターのような機関です。実際に、この数より大幅に多いと思いますけれども、例えば、こちらの調査に入らない数、情報とかも含めて、私のほうから考えると、もっと多いのではないかなと思います。**【スライド⑥-7】**

もう1つの統計のデータをちょっと見ていただきたいですけれども、こちらも国際交流機関の調査したデータです。こちらをご覧になっていただくと、赤い線はこちらですね。この赤い線は機関数です。日本語を実施している機関ですね。それから、紫のほうは、こちらは国際交流機関とかJICAから派遣されている専門家の数です。緑のほうは学習者の数ですけれども、2014年度のデータによると、学習者はまだ約1万人ぐらいですね。それから、機関数はまた47機関ですけれども、2006年度になるとこのように変わりました。**【スライド⑥-8】**

こちらはピラミッドの形になっていて、ちょっとわかりづらいと思うんですけ

れども、こちらは中等教育における外国語教育のスタートの順番です。下から上までは早い順番ですね。最初は英語とかフランス語、ロシア語、中国語とか、日本語教育のほうは、こちら黄色いのマークをしていますが、5 番目ぐらいに中等教育に導入されているということですね。

2016 年の段階では、ベトナム全国で 7 つの都市とか県とかで行われています。その中に中学校の数も結構あります。中学校でも日本語教育を実施されています。これは 26 校ですね。それから、高校は 22 校です。学習者の人数は約 2 万 5,000 人ぐらいで、これは 2016 年の段階です。**【スライド⑥-9】**

現在、2019 年の統計ですけれども、こんなに上がりました。ハノイ、北部は高校 6 校と中学校は 39 校、小学校 4 校です。中部のほうは、フエ、ダナンを含めて高校は 6 校と中学校は 7 校ですね。南部、南のほうは、ホーチミンとかビンズン県とか含めて、高校 12 校と中学校は 8 校、小学校 1 校です。現在の段階では、ベトナム全国の中等教育、ちょっとこの数は 78 校ですけれども、これは高校と中学校です。この数を見ると多分おわかりのとおり、中学校のほうが多いですけれども、高校の数は限られています。ですので、幾つかの課題があります。後ほど説明させていただきます。**【スライド⑥-10】**

次に、これまでご覧になっていただいた情報を見ます。ベトナムにおける中等教育の日本語教育はかなり遅れていると思いますが、普及程度は比較的高いと思われます。それから、日本語がベトナムの民間教育のシステムで教えられる外国語で認められ、盛んになっていると言えると思われます。**【スライド⑥-11】**

続いて 2 番目の内容に入りたいと思いますが、その前に課題についてです。先ほど申し上げました、実施している日本語教育教育機関からの課題です。まず、中学で教えられる学校の数は多いですが、高校への進学の道はまだ狭い、つまり、高校の数が少ないです。もう 1 つの課題は、教科書問題、教師問題とか教材問題、学習環境問題などの問題が顕著です。もう 1 つは、ベトナムの政府やの支援や予算的な裏づけはまだ十分ではなく、日本側のほうに依存しているので、中等教育における日本語教育はまだ受動的であるのではないかなと私は思います。**【スライド⑥-12】**

続いて、2 番目の内容に入りますけれども、中等教育における日本語教育の内容、それから日本語レベル、関心分野、高校生の日本語留学への志向などについて進めます。これらの内容は、主に外国語大学附属高校の事例の調査から分析し

ます。

簡単に、この外国語大学附属高校を紹介させていただきます。この高校は1964年に創立され、現在、学習者の数は1,500人ぐらい生徒がいます。教師数110名の中、日本語教師は7名です。日本語学習者の数は300名ですね。この高校は、現在私が勤めている大学の附属高校ですけれども、この高校はかなり名門高校で、入学試験はとても難しいですね。だいたい20名の中で1人しか採らない、みたいな、結構、入試の厳しい名門校、難しいので有名な高校です。**【スライド⑥-13】**この高校の外国語大学に所属して日本語教育の、ちょっと簡単に紹介しますけれども、ここの高校での日本語教育の開始は2005年ですね。さっき申し上げたように、現在の学習者の数は300人ですけれども、第一外国語としての日本語を学習しているのは252人で、第二外国語としての日本語学習者は50人です。この高校の特徴としては、外国を専門として学習されており、第一外国語を選択する以外、もう1つの外国語を勉強できるという特別な制度というか、教育方針を持っている高校です。**【スライド⑥-14】**

この高校では現在7カ国語を教えられているんですけれども、人気ランキングから考えると、こちらはインタビューからまとめた結果ですけれども、やっぱり英語のほうが一番人気ならびに日本語は最近とても人気があります。そのあと、韓国語、中国語とドイツ語、フランス語、ほかはロシア語なども教えられています。**【スライド⑥-15】**

学習の内容ですけれども、こちらはちょっと文字が小さくても見づらいと思うんですけれども、こちらはこの高校の1週間の学習科目です。日本語はだいたいちょっと、すみません、こちらに、見えるかどうか、申しわけないですけれども、このNhyという言葉が、こちらは日本語を教えている、日本語ということです。こちらは高校の3年生です。こちら1、2、3ですね。1、2、3、4、5、6、つまり3年生のときは1週間6コマ教えられています。1つのコマは45分。それに対して、1年生の場合はもっと多めに教えられて、学習しないといけないです。こちらは、例えば、1年生のD2というクラスですけれども、こちらは日本語、「Nhật」（ニャット）という言葉ですね。1、2、3、4、5、6、7、8、合計8コマ教えています。つまり、ここの学習時間から考えると、かなり多いと私は思います。現在、大学生が勉強している日本語の時間でも1週間10コマぐらいですので、高校でこのぐらい勉強しているというのは非常に多いと推測でき

ます。**【スライド⑥-16】**

学習内容です。こちらは現在この高校が使っている 2 つの教科書です。右のピンクの色のほうは高校の 2 年生が使っている教科書です。この教科書も外国語大学の先生たちが作った教科書です。右の青いほうは、3 年生が使っている教科書です。両方とも後期の教科書です。**【スライド⑥-17】**

簡単にまとめて申し上げますと、主に日本文化とか日本語社会の紹介などがこの教科書の主な内容ですけれども、ベトナムにおける日本語教育を初め、中等教育における日本語教育は、主に文法学習を中心にしています。日本語学習イコール日本語の文法学習みたいな感じですね。それから、日本語能力試験のため、日本語学習するのが現状です。実用的な日本語はまだ少ないというか、会話力が弱いというのが現実です。**【スライド⑥-18】**

日本語を履修する学生が関心を持つ専門分野ですけれども、こちらは人気順にまとめました。こちらもインタビューで学習者たちの意見を聞きました。一番多く望んでいる進学先というか、勉強したい科目は、社会系のほうですね。社会系といえば、経済とか国際とか言語とか教育などのような専攻を目指しています。2 番目は理工系ですけれども、機械とか技術とか建設のような専攻を目指す人が多いです。3 番目は IT 関係の専攻を目指す人が多いということがわかりました。**【スライド⑥-19】**

次に、この高校で卒業をしたら、日本語のレベルです。それから、留学志向についてパイロット調査を実施しました。調査の実施期間はつい去年の 12 月に行いました。アンケート調査とインタビュー調査を行いました。使用言語はベトナム語だったんだけれども、この調査の対象者は、附属高校の 2 年生と 3 年生含めて 105 名に依頼して実施してもらいました。**【スライド⑥-20】**

その結果、まず日本語レベルについてですけれども、高校を卒業した段階で N1 に合格する人は、だいたい 14 名です。3.3%ぐらいを占めています。それから、N2 に合格する人は 37 名、N3 は 30、N4 は 24 名です。つまり、この高校を卒業段階では、だいたい N3 とか N2 のレベルに達している人が多いと思われます。ベトナムの学習者たちは、なかなか N1 に合格する人は非常に限られています。大学を卒業しても、だいたい N2 ぐらいのレベルしか達しない、できない大学生が多いので、この高校は特別にエリートの学生が多いので、N1 に合格すると。こんな数になっています。**【スライド⑥-21】**

次に、卒業後、日本への留学を考えるか、みたいな質問をしたんですけれども、その答えは、「はい」と答えるのは 47 名ですね。ざっくりと約半分は日本に留学したいということです。「いいえ」が 24 名、まだ考え中なのは 22 名と、「その他」は 12 名という結果が出てきました。**【スライド⑥-22】**

この「その他」は何かというと、こういう具体的な内容を書いてもらいました。例えば、奨学金を受けたら入学すると、6 名が回答しました。そのほかは、ベトナムの大学卒業後、日本の大学院に留学したいと答え人は 3 名。また、親の経済状況によると答えたのは 3 名でした。**【スライド⑥-23】**

次に、日本へ留学する場合は直接、日本の大学に入りたいかという質問を聞きました。その回答は、「はい」と回答したのは 49 名。「いいえ」が 20 名と、考え中なのは 26 名と、「その他」は 10 名です。**【スライド⑥-24】**「その他」は何かというと、日本語が心配だから、ちょっとまだ考えていない。あるいは、英語で勉強したいという答えをアンケートの回答用紙に書いてもらいました。**【スライド⑥-25】**

この調査の最後の質問として、日本の大学の受け入れへの期待は何ですかという質問しました。これも順番ですけれども、一番多いのは奨学金への期待が大きいです。また、学費の免除ですね。学費免除、全額免除あるいは一部免除されるといった対応が望ましいです。そのほかは、受験を簡略、簡単にして、EJU みたいな試験がなかったらいいなと思う人が多いです。また、面接か小論文か、1 つ、簡単にする。結構、小論文とか面接は苦手な人が多いみたいですね。また、もし日本の大学で英語で学習できたらいいなという意見もありました。日本語だけではなく、英語の教材の使用とか、英語維持環境みたいなのがあったら、それは一番いいという意見が出ました。**【スライド⑥-26】**

最後の 3 番目の内容に進みたいと思います。こちら日本の大学への進学の課題。こちらは私なりに考えましたし、学生からの意見をこちらにまとめました。やっぱり一番大きい課題は経済課題です。日本の大学の学費が高いとか、日本での生活費が高いとか、そういう心配が大きいです。続いては、日本語が課題ですね。やっぱり日本語で教科の理解とか、学習の内容理解の心配も大きいです。もう 1 つは、自立課題です。日本の生活に慣れないとか、自立できない。これはちょっとベトナムの特徴かもしれないですけれども、この高校の生徒たちはまだ親が学校まで送ったり、学校が終わったらまた迎えにきたりというように、まだ全然自

立していないというか、まだほとんど勉強以外は、ほかの仕事はあまりしないです。家事もあまりしないとか、そういうふうなので、自分からも心配し、親も心配します。一人で外国に勉強させるのは、親の心配も大きいです。**【スライド⑥-27】**

もう１つの課題は進学課題ですね。これは何かというと、やっぱり日本の大学の情報不足だと思います。さっき郭先生などもおっしゃっていたように、やっぱり日本の大学の情報はまだ十分ではない。現在、インターネット環境で簡単に検索とかできますけれども、英語で書かれている情報は限られていますので、みんな日本語の理解はまだそこまでできないので、難しいですね。少ない。

もう１つ、EJU の課題はやはり大きいです。すみません、さっき説明しなかったですが、EJU というのは日本留学経験です。こちらもベトナムの生徒たちの大きい壁です。

もう１つは、教育課題は、生徒たちの意見によると、日本の大学は柔軟度がまだ足りないということです。これは何かというと、例えば、ヨーロッパとかアメリカの大学なら、例えば卒業しなくても６年間とか、もうちょっと伸びても大丈夫だけれども、日本の大学はこれができるのか、できないのかといった心配があります。

もう１つは、教授法とか学習法に、ベトナムの高校の生徒たちがすぐなじめるかどうか。それも心配です。

もう１つは、仲間づくりという課題があります。みんなは日本に行って友達をつくれるか。日本で勉強するとなかなか友達をつくれないという心配というか、そのうわさが結構あります。なので、友達、仲間づくりという課題も結構あるという意見もありました。**【スライド⑥-28】**

もう１つ、そのほかには、これはあまり多くない意見ですが、英語の低下、つまり英語の力が落ちるかなという心配もありました。

それから、進学先です。日本の大学を卒業したら、もし大学院へ進学したいなら、英語が落ちるから、日本の大学しか進学できない。ヨーロッパとかアメリカへは行けないという心配もありました。

そのほか、地震。確かに地震は多いですね。

就職環境は、これもそんなに多くない回答ですけれども、こちらは日系企業とか、日本での就職か、ベトナムに帰ってベトナムでの日系企業しか就職できない、

みたいな心配ということです。**【スライド⑥-29】**

最後に簡単にまとめていくと、日系企業の進出は、現在ベトナムで非常に目立っています。それから、日本の文化もすごく、非常に盛んになっております。この2つとともに、ベトナムの中等教育における日本語教育はブーム期を迎えています。スタートはすごく遅れているんですけれども、先ほど申し上げましたように、数も多いし、各高校、各地域、地方などにも普及しています。そのため、中等教育における日本語教育が著しく発展し、学習者の数もどんどん増えています。その一方、教科書とか学習内容とか日本語教師など、学習環境の問題も目立っています。

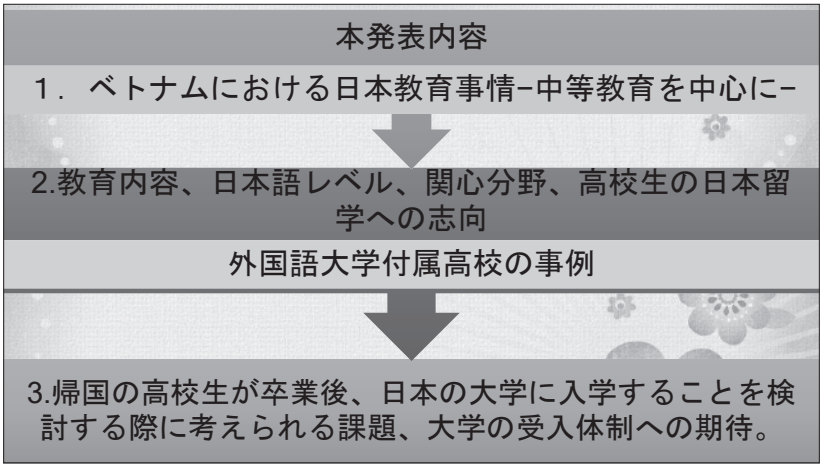
最後に、こちらの高校を卒業直後の時点での日本語留学志向は、さっき申し上げましたように、非常に高いと思います。壁としては、経済問題ですね。日本語能力、日本の大学のスクールライフのような課題も多くの皆さんからの意見としてありました。これらの課題をクリアできれば、日本語学校などを経ずに、日本語学校に行かずに、直接、日本の大学に入る、入学する展望が大きくなるのではないかなというのが、私の本発表の結論です。**【スライド⑥-30】**

以上、ご清聴ありがとうございました。**【スライド⑥-31、32】**

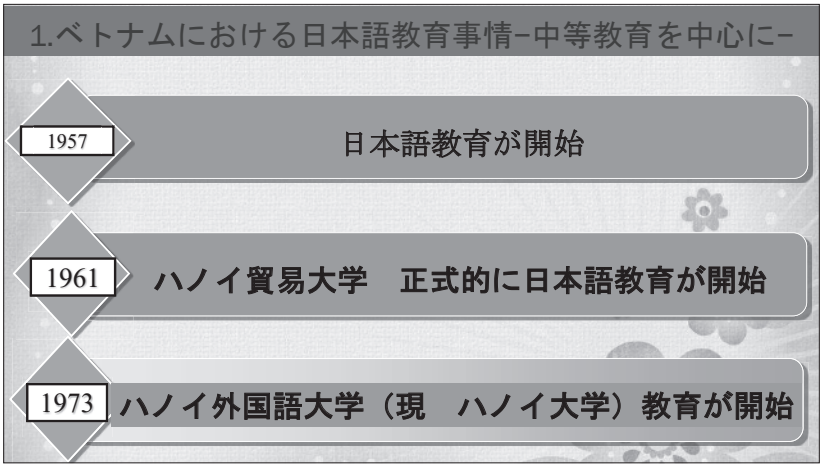
○**嶋原**　大変貴重なお話をありがとうございました。

【スライド⑥-1】

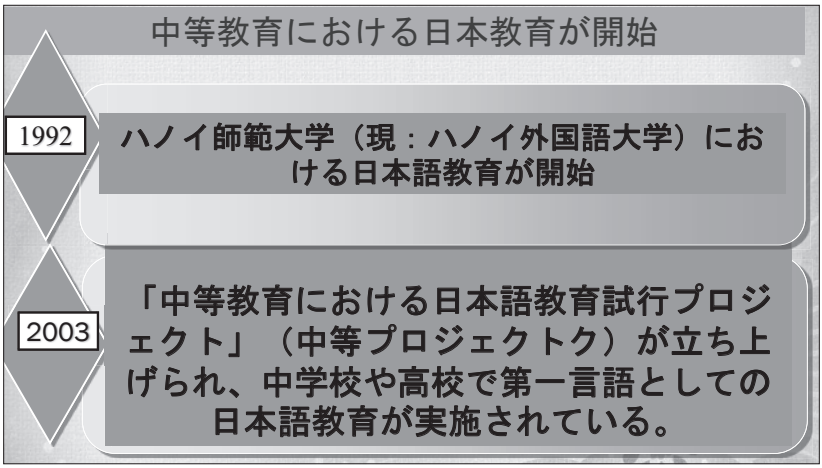
【スライド⑥-2】



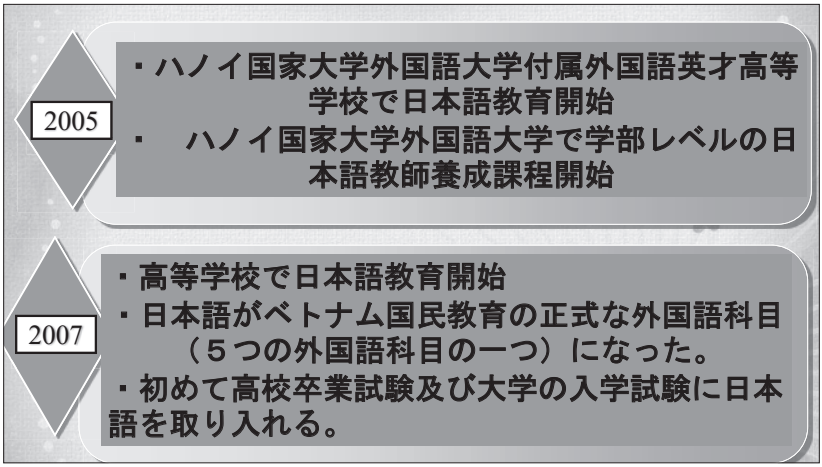
【スライド⑥-3】



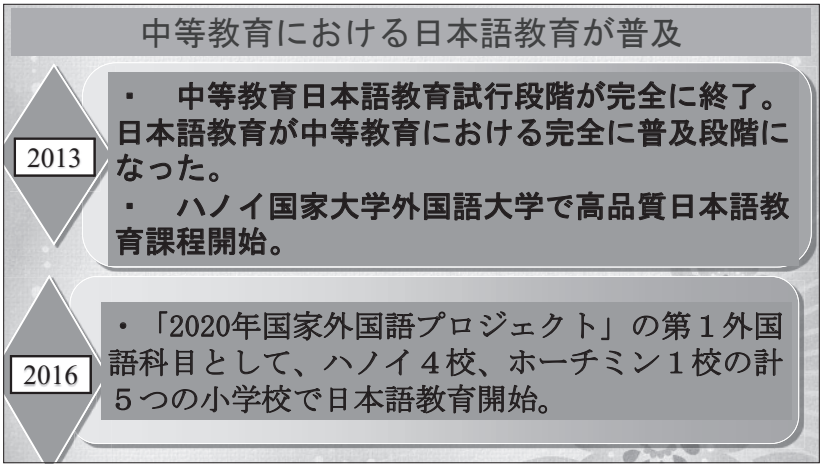
【スライド⑥-4】



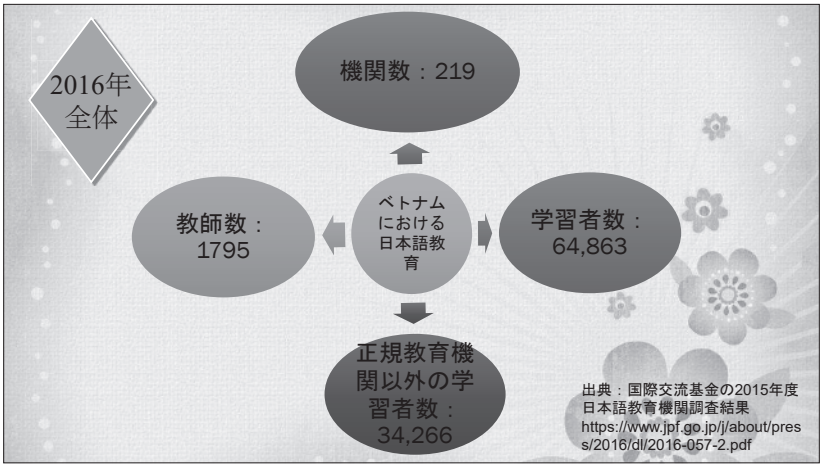
【スライド⑥-5】



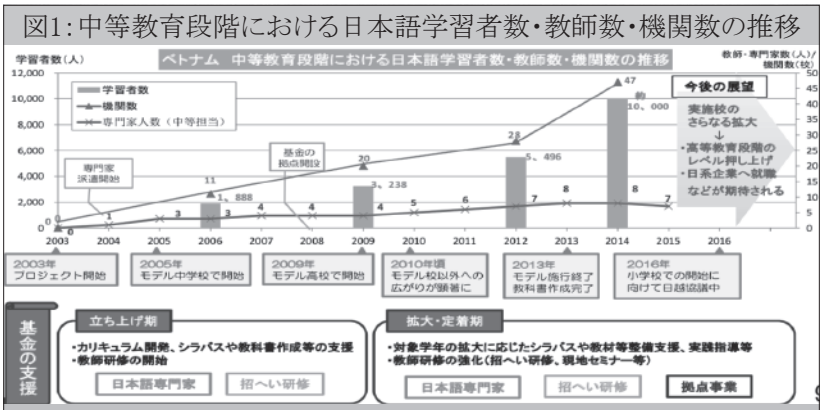
【スライド⑥-6】



【スライド⑥-7】

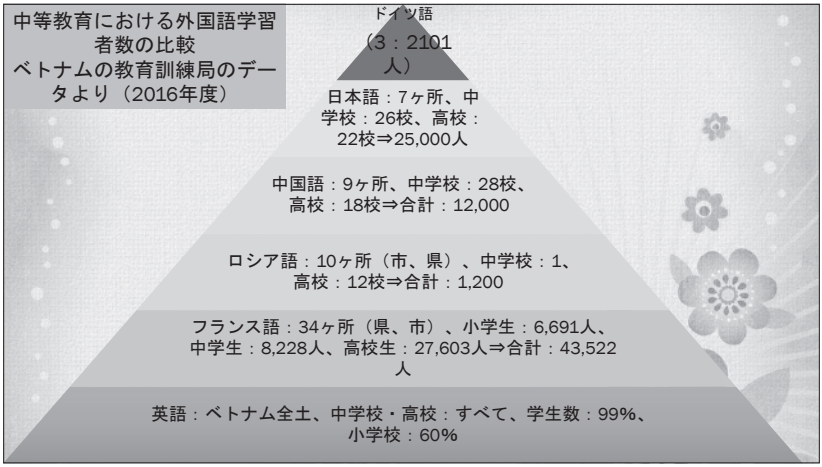


【スライド⑥-8】

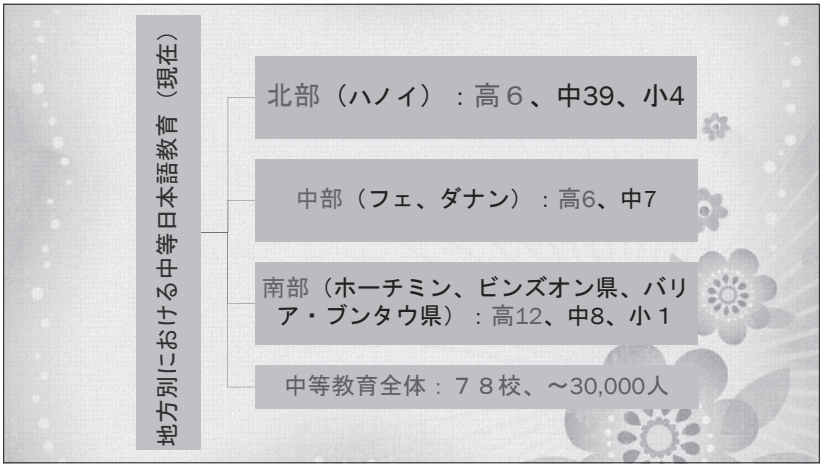


国際交流基金（平成27年行政事業レビュー説明資料）

【スライド⑥-9】



【スライド⑥-10】



【スライド⑥-11】

１の小括

・中国語教育（2000年）、フランス語教育（100年）、ロシア語教育（60年）と比べると日本語教育はかなり遅れたが、中等教育での普及程度は比較的高い。

・日本語がベトナムの民間教育システムで教えられる外国語として認められ、盛んになっていると言える。

【スライド⑥-12】

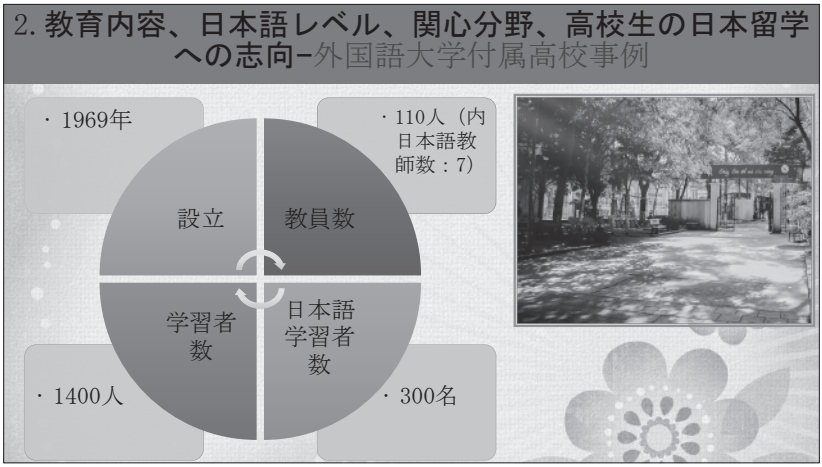
☆課題

・中学校で教えられる校数は多いが高校への進学道は狭い。

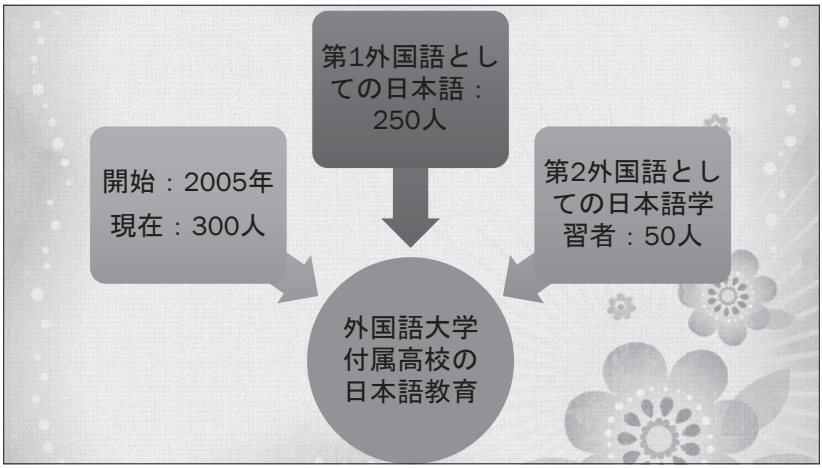
・教科書問題、教師問題、教材問題、学習環境問題

・政府の支援や予算的な裏付けは十分ではなく、日本側（国際交流基金、日本国大使館、日系企業）に依存しているため、受動的である。

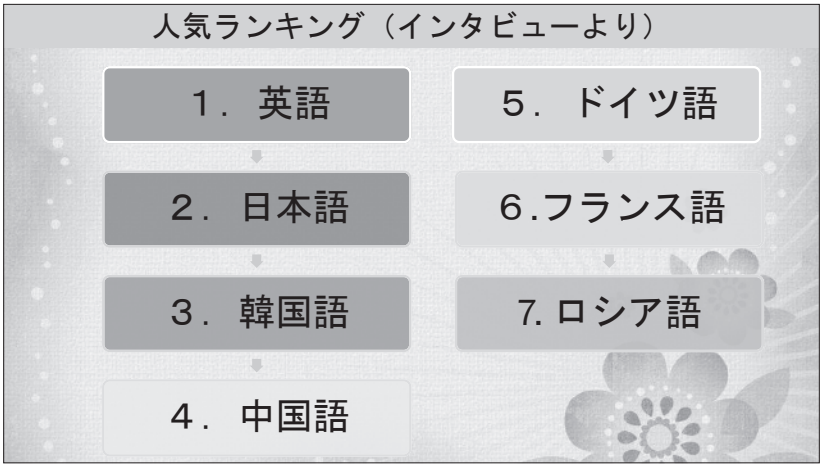
【スライド⑥-13】



【スライド⑥-14】

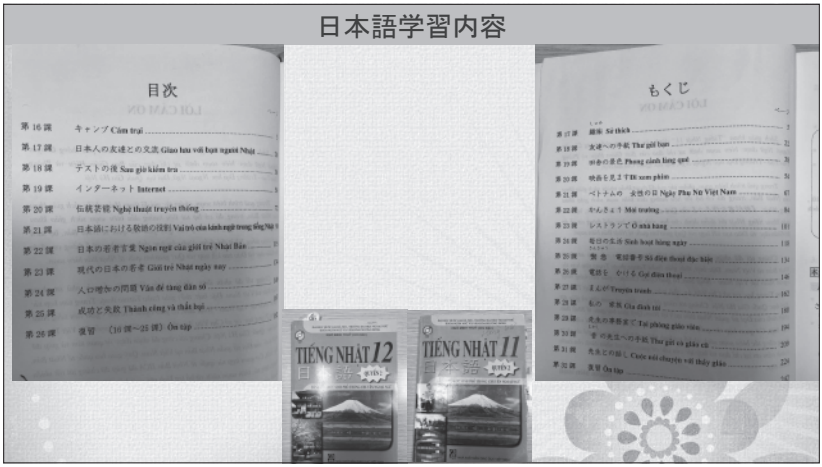


【スライド⑥-15】

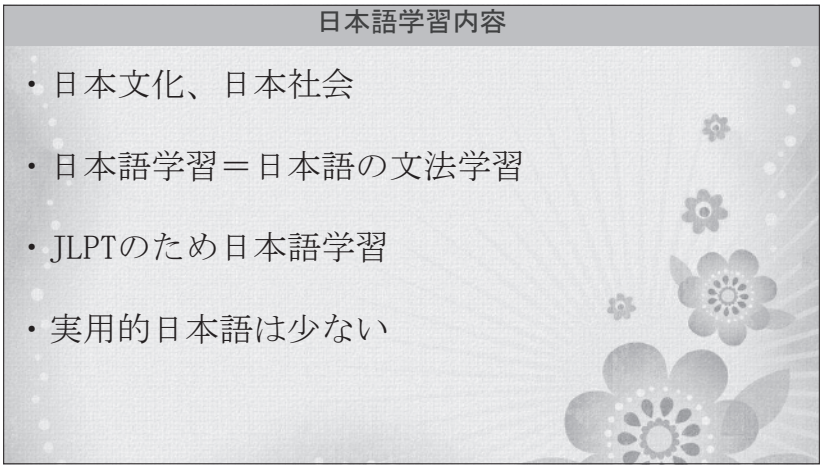


【スライド⑥-16】

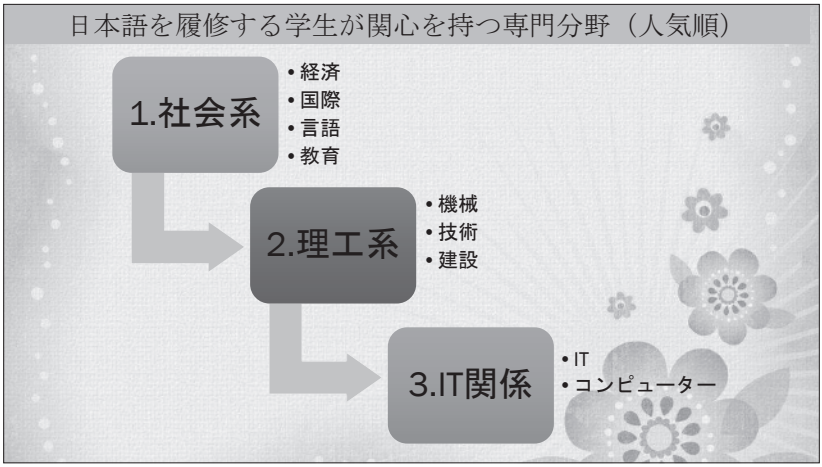
【スライド⑥-17】



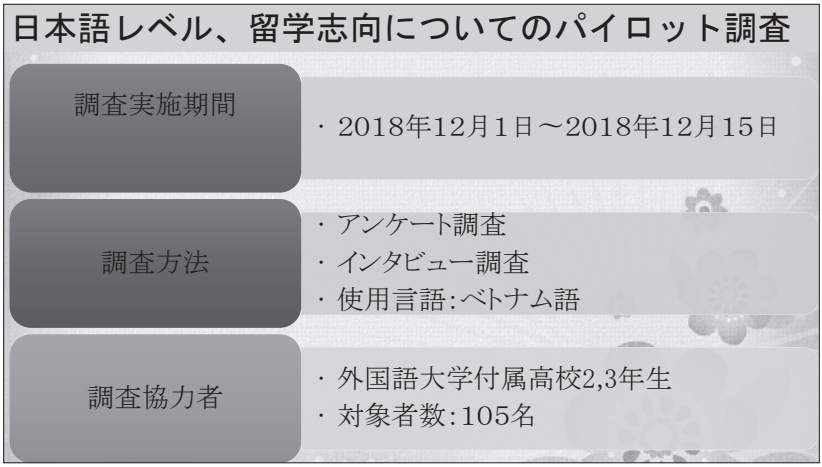
【スライド⑥-18】



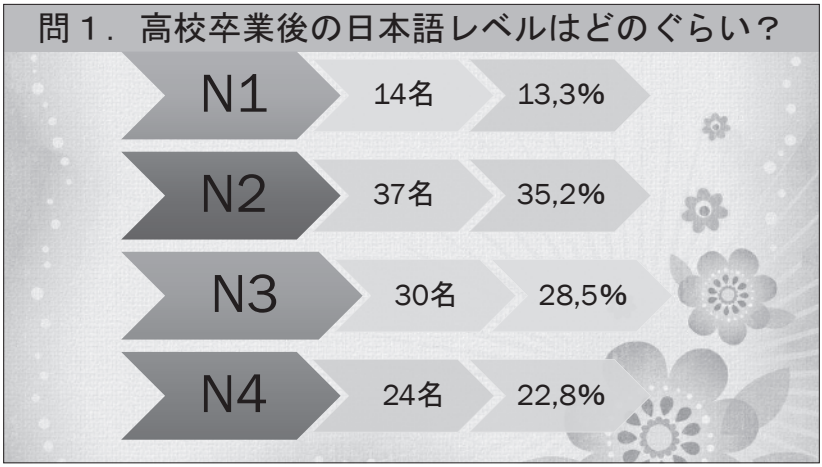
【スライド⑥-19】



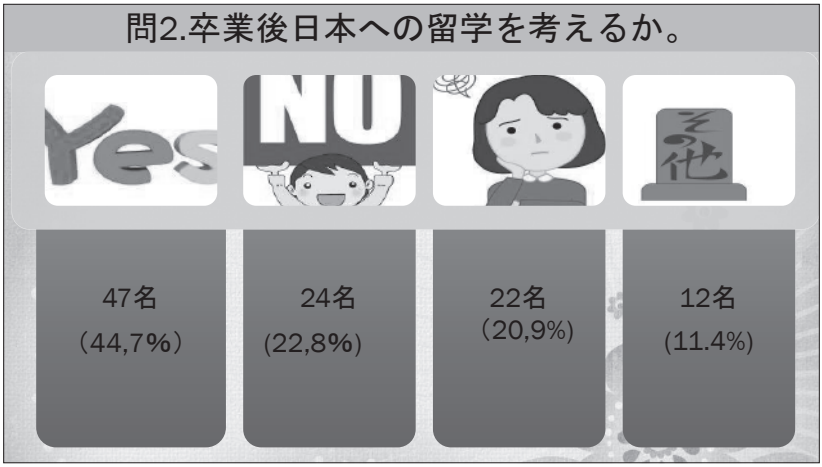
【スライド⑥-20】



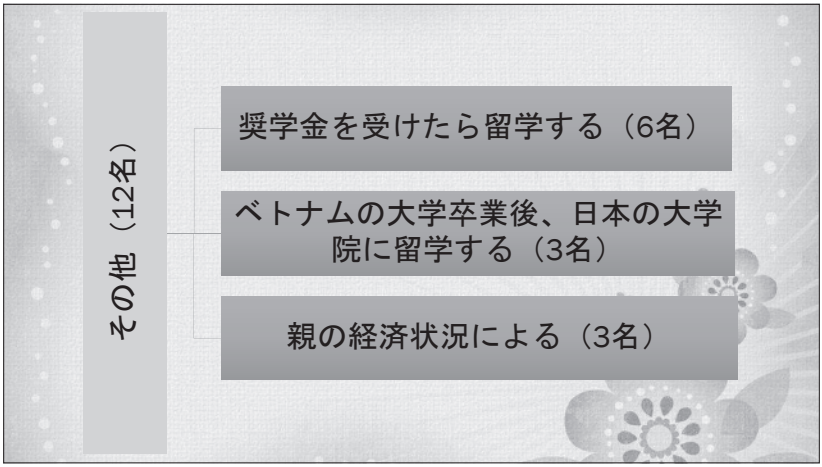
【スライド⑥-21】



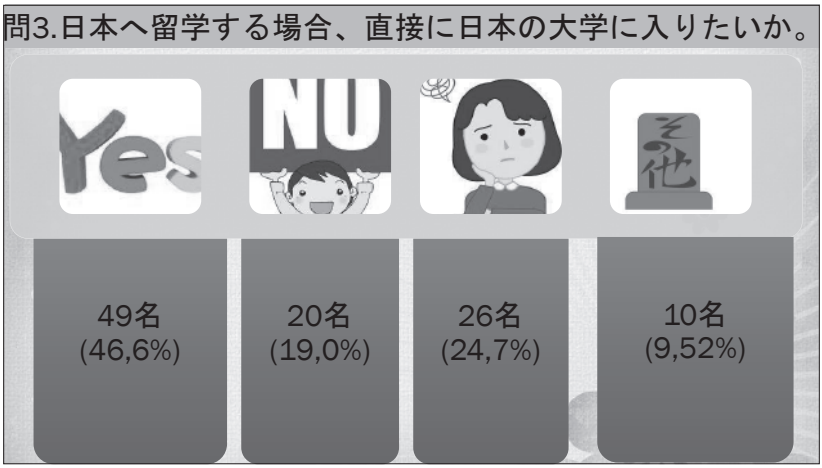
【スライド⑥-22】



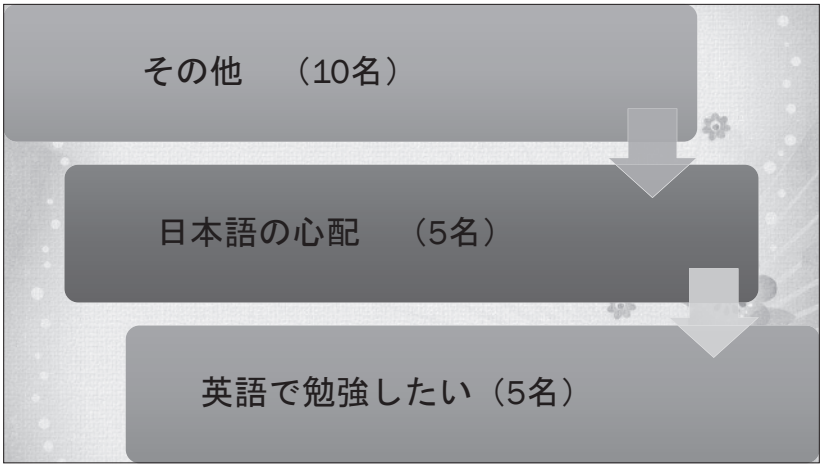
【スライド⑥-23】



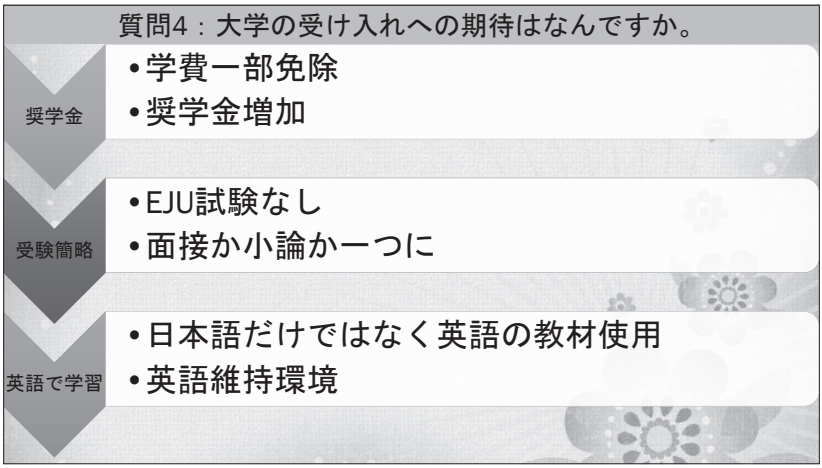
【スライド⑥-24】



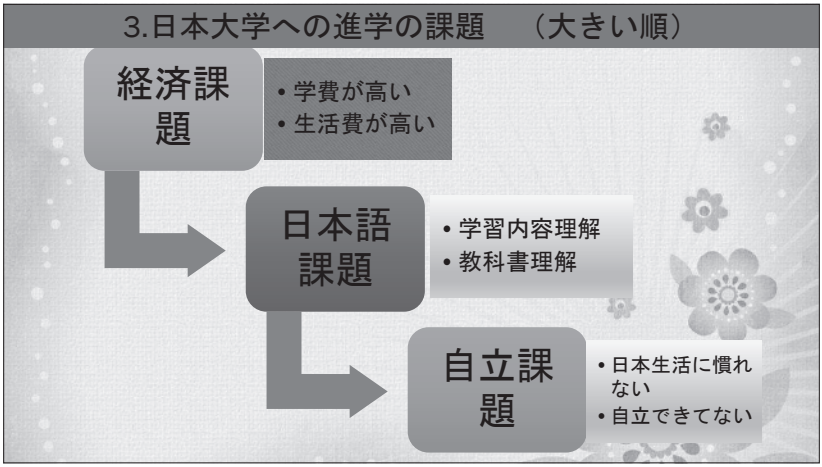
【スライド⑥-25】



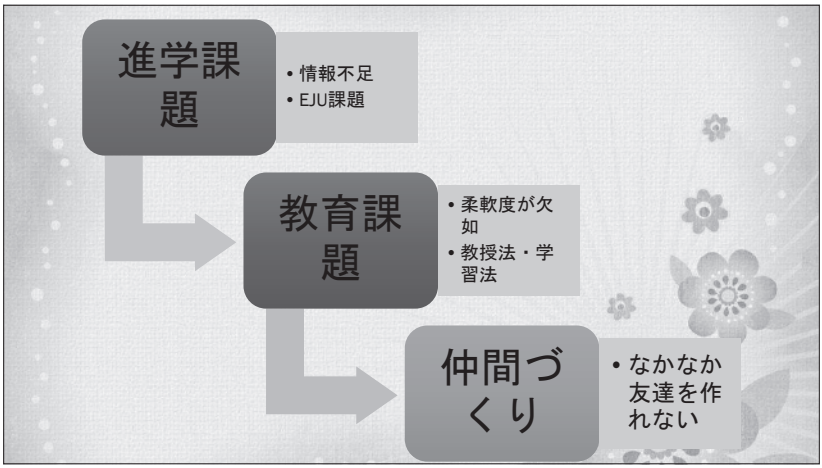
【スライド⑥-26】



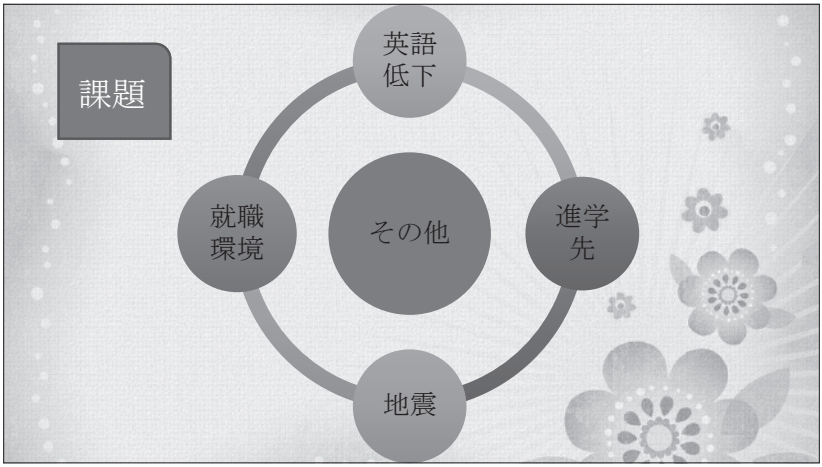
【スライド⑥-27】



【スライド⑥-28】



【スライド⑥-29】



【スライド⑥-30】

まとめ

・日系企業の進出と日本文化導入とともに、ベトナムの中等教育における日本語教育はブーム期に迎えている。

↓

・中等教育における日本語教育が著しく発展し、学習数もどんどん増えている一方、教科書、学習内容、日本語教師、学習環境の問題も目立っている。

・高校卒業直後の時点での日本留学志向が非常に高いが、壁としては経済問題、日本語能力、日本大学のスクールライフのような課題も多く上げられる。これらの課題をクリアできれば、日本語学校などを経ずに直接に日本大学に入学する展望が大きい。

【スライド⑥-31】

参考文献：

1. Cao Le Dung Chi(2017)『ベトナムの外国語教育政策と日本語教育の展望』大阪大学博士論文
2. Ngô Minh Thủy (2009) 『Tiếng Nhật 11(日本語11）下』ベトナム教育出版社
3. Ngô Minh Thủy (2009) 『Tiếng Nhật 12(日本語12）下』ベトナム教育出版社
4. Đào Thị Nga My (2018)「ベトナムの日本語教育の事情–現状と今後の期待」『日本語教育学会』世界の日本語教育–ベトナム
5. https://www.jpf.go.jp/j/about/press/2016/dl/2016-057-2.pdf

【スライド⑥-32】